

もののじょうず

年1回の成人病検査を今年も受けた。これまでなん回もスイスイと青信号を通り抜けていたのだが、今度はそうは間屋が卸さぬとばかり赤信号になった。胃にポリープの疑いありという診断である。二次検査で胃カメラによる内視をしてもらうことになった。



これまで、胃の調子がおかしいという事が殆どなかったから、胃カメラなんぞ話には聞いていたけれども一度もお目に掛かっていなかった。もっぱら、経験の有りそうな人から情報を集めることにした。いわく「イヤーあれはひどいよ」、いわく「イヤイヤ、クット飲めばなんともないよ」と諸説紛糾である。定説の得られないまま、覚悟を決め日時を打ち合わせて検査センターにおもむいた。

緊張を和らげる注射を打ち、喉に麻酔薬を含むこと数分、診察台に上がる。担当は若い女医さんであった。これは幸先よいと一瞬思ったが、取り出されたのが先端から強烈な光の出ている真っ黒な管である。最初の説明では10mm位の太さだと聞いたのだけれども、どうみても13mm鉄筋くらいの太さに見える。これはと思ったけれども、もう遅い。イヤイヤその苦しかったこと。時間の長かったこと。地獄の責めとは少々大袈裟かも知れないが、とにかく訴えようにも声がだせないし体も動かせないのだ。

結果は、ポリープは全く無くて、レントゲンでは判らなかつた慢性胃炎、出血性胃潰瘍の御託宣であった。自覚症状が全くないまま、本院の内科で治療を受けることになった。担当医自身そんな顔色ではないのだが、と首をかしげながらも薬の処方してくれた。

一週間後ふたたび診察を受けるはずのところ、仕事の都合で、二週間の後になった。診察室に入ると、別の医師である。カルテを見ながら「もう少し深刻に考えないと駄目ですよ。いつかつぎ込まれてもおかしくないのだから」とかなりの叱責口調である。先回の医師とは随分判断が違うなと考える間もなく、再び胃カメラで検査をしようとする。またあの苦しみをと思ったけれども、ここまでくればもう医師の指示に

河合松永建築事務所 大塚 一三

従うより仕方がない。

日時を予約して、診察台に上がる。先の真新しいセンターの部屋と違って古い薄暗い検査室である。又々嫌な予感におそわれた。しかし現れたのは、かなり経験のありそうな、また別の医師であった。「どうしたら楽になるのですか」との問いに「体の力を抜きなさい」のただ一言である。口を開けると、もういきなり例の先端から光を出す黒い管が突っ込まれてきた。アッと言う間もない早業であった。これはと思ったが不思議と苦しくない。どうなったのだろうと考えている内に検査は終わってしまった。思いだしてみると筋肉注射は打ったのだが喉の麻酔はしていなかったのである。後から確かめてみると管に塗ってあったという。結果は「今日の検査では異常がない」とのことであった。

この二カ月の間の医師との接触で、いかに同じ事象に対する専門的判断が人によって異なってくるかに対して驚くとともに、その前後に必要な、次元的には一段低いとされる技術——検査、注射等のテクニック——に練達することもまた、専門家として非常に重要な事ではないかということに改めて痛感した。そしてこれは、私自身の自分の仕事に対する反省でもある。すなわち、このことは私達の専門でも全く同じであって、誤りのない設計と判断のために、構造理論の研鑽追求の必要なことは勿論であるが、高度な理論から生まれた設計も結局は設計図に表現されて実現に移される。この図面の実現には美しい納まりをもったデテールが必要であって、細部の仕事に対する深い理解と数多くの経験がその基礎となっているのだ。

「亀山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて、水車を造らせられけり。多くの銭を給いて数日に営み出だして、掛けたりけるに、大方廻らざりければ、とかく直しけれども、ついに廻らで、徒らにたてりけり。さて、宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかにゆいて参らせたりけるが、思うように廻りて、水を汲みいるゝ事、めでたかりけり。萬にその道を知れるものは、やんごとなきものなり。」とは今を去ること六百五十年、兼好法師が書きとめた言葉である。

61年度中部支部総会開催



昭和61年度構造家懇談会中部支部総会が開催されました。

日時 昭和61年5月17日(土)13:30~14:30

場所 弥生会館

司会 森田 富士男氏

議長 稲田 丞氏

議事 昭和60年度支部活動及び決算報告

昭和61年度支部活動方針及び支部予算

総会に先立ち出席者数の確認が行われ、正会員数72名の内、出席者数56名(委任状25名を含む)が確認され、総会が成立し議長選出後、議事録記録者に松久哲雄氏、同署名者に伊藤晃・宮田正明の両氏を指名。審議事項では、辻井理事よ

講習会「新しい構造設計法の紹介」

の概要報告

「鋼構造荷重・耐力係数設計法試案」が日本建築学会から発表され、これをテキストに去る6月28日当支部及び学会東海支部構造委員会の共催にて、新日鐵名古屋営業所の会議室で講習会が開催されました。参加者は53名で、講師には名大の坂本順先生、名工大の小野徹郎先生をお迎えしました。

坂本先生からは、確率統計論に基づく荷重・耐力係数設計法(LRFD)の背景についてお話がありました。概要は、技術や経済の国際性が豊かな中で、ヨーロッパやアメリカでLRFDが発表されたこと。計算精度は一段と向上したが、それに使用する設計荷重の根底があいまいなこと。機械工学や宇宙工学では信頼性理論が取り入れられており、これらの分野との統一を計る必要があること。などでした。

小野先生からは、試案の構成についてお話がありました。概要は、終局限界状態と使用限界状態の2つの限界状態を定



り支部活動報告が、又本郷理事より決算報告がなされ、木坂会計監査よりの確認報告後、満場一致で承認されました。

又、61年度の活動方針が渡辺支部長より、予算案が本郷理事より説明がなされ、一括審議後、提案通り可決されました。

総会に続き同所に於て、技術委員会報告(1)くい及びくいに接合する部材の設計(2)鉄筋コンクリート建物のひび割れ対策一がなされた後映画「さび」、「変貌する東京駅」が行われました。

総会終了後18:00頃同会館別室にて、懇親会が開かれ、一献くみかわしながらの歓談に話がはずみました。

義していること。ある確率分布に従う耐力と荷重の組合せから、破壊までの余裕を「信頼性指標」 β で表わすこと。各種の構造物や構造要素に対して矛盾のない信頼性(安全性)のレベルを設定することができること。などでした。

この後、活発な質疑が行われ、最後に名大の多賀先生から閉会の挨拶があり、盛会のうちに終了しました。



市総合体育館見学会

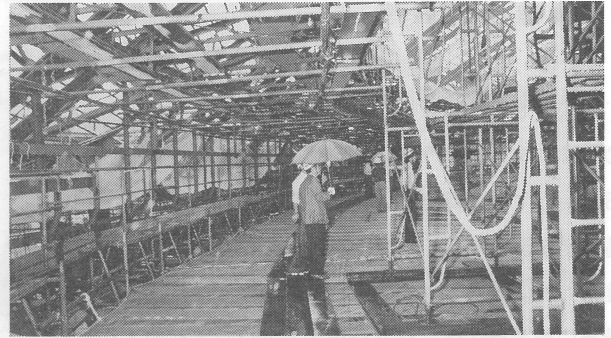
昭和61年7月5日(土)構造家懇談会中部支部主催で、『名古屋市総合体育館(仮称)』の建設現場の見学会が行われました。

当日は、あいにく朝からはげしい雨ではありましたが、熱心な31名の会員の出席で盛況のうち、無事終える事が出来ました。

名古屋市総合体育館は、名古屋市が南区東又兵工町5丁目の旧テイジンジョイランドゴルフ跡地に計画したもので、敷地面積は31,983.10㎡であり、第1競技場棟、第2競技場棟及び管理棟から構成されています。

第1競技場棟は、地上3階地下1階で屋根は鉄骨造のドームを有する、延べ面積約15145㎡、軒高22.4m、最高高さ41.5mのSRC造の建物であり、第2競技場棟は、地上2階地下1階で、延べ面積約5816㎡、軒高16.8mのRC造の建物であります。

設計は、(株)梓設計が担当、名古屋市建築局特殊建築事務所が監理し、工事は大林フジタ西松五洋東急からなる企業体が



担当。昭和60年4月の着工以来昭和62年3月31日の竣工を目指し、順調に進行しています。

ごう雨の中、カサをさしながら、びしょぬれになり見学した第1競技棟の屋根ドームは、鉄骨建方が、終了し、ジャッキダウンする寸前の状態でした。中部大学の塚越先生から、トラス支承部の詳細、仕口プレートの設計に関する話など、また工事を担当されている船山所長より、施工時の建方にまつわる苦労話などを拝聴し、そのあと降りしきる雨にまけじと活発な討論が行われ、4時すぎ散会となりました。各会員とも風邪を引かぬよう、まっすぐ(?)家路についた土曜の午後でした。

会員紹介

(有)大石建築設計事務所 大石 博司

昭和31年、郷里の静岡に戻り設計事務所に入所しました。

「東工大卒はその日から構造設計が出来る」と重宝がられたものの、構造だけに偏りたくなかった為、我儘を通して、二足のわらじの勤務でした。



昭和42年妻と2人のささやかな事務所を構えました。

妻は東京で構造事務所に勤めた事があり、その後も仕事を続けて居ましたので、私は、施主との打ち合せ、官庁の折衝、現場の監理、所員の指導にかまけて、構造の仕事は、殆ど妻任せにしていました。

その私が再び構造に引き戻れたのは、「あす起きても不思議ではない」と言われた東海地震の対策に、最初から手を染め、首までどっぷり漬けられた為です。

当時の山本静岡県知事が政治生命を賭けた東海地震対策で、耐震診断・補強を、私達、静岡県建築事務所協会が、電電公社のDEMOS-Eシステムを利用して行いました。

構造家懇談会設立の際、お誘いを受けて入会させて戴いたのも、後発の協会員や、その職員への指導的な立場から種々の情報を交わせる皆さんの仲間に加えて戴くためでした。

折角、支部の技術委員に指名されながら、地理的条件から、

なかなか出席できず、迷惑を掛けるばかりですが、昨年より2年任期の耐震判定会委員長が済めば、比較的時間の自由が得れると思いますので、今しばらくの御容赦を御願います。

建築非芸術論

名相 建築設計事務所 稲田 丞

随分多数の人が建築は芸術なりとの信念を持っている事と思う。しかし芸術のひとつの特徴は無責任であることだ。近松門左衛門の心中物が盛んだった時、心中事件が頻発したが、近松は罰せられる事はなかった。



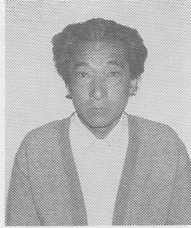
三島由起夫の「金閣寺」を真似るものもいた。小説や映画を真似た犯罪は枚挙にいとまがない。正岡子規31才、樋口一葉25才、石川啄木27才、立原道造25才、芥川龍之助36才、大宰治40才、三島由起夫38才、何れも死亡年令であり、何人かは自ら命を絶っている。

建築には必ず責任が付帯している。自分だけの満足では済まないし、無責任な行為には罰が与えられる。無責任と責任著大な建築家で余り若くして死んだ人を聞かない、その点から建築は非芸術であると云える。前記立原道造は、詩人であり、建築家であった。例外である。

構造設計雑感

柏原建築設計事務所 柏原 忠史

昭和38年に40mスパンの工場屋根の δ 撓みをカステリアノの定理で、15日位かけて手計算で解いた。谷口忠著建造力学を読んで解くという事が力学の勉強だった。鉄骨はクレモナの図式解法で最後の線が点にびったり合致するとほっとしたものだが。



現在はパソコンの変形法で答は出るが、機械の約束事というのか、扱い方に神経を使うのみでERRORの出ない様に気を使うわけで、答が出るとそれで終了という事である。つまり昔は一つの建物を解けば経験となり満足感があった。今は機械になれるという事だけだ。手計算25年間とパソコン5年間の結果の感想である。先日NHKテレビでコンピューターの業務にはうつ人間が適応と云っていた様だが本当でしょうか。仕事上運動不足のためテニスをやっているが、7年程以前からデカラケが出た。デカラケはスイートスポットが広いので、昔に比べるとボレーは安易になった。



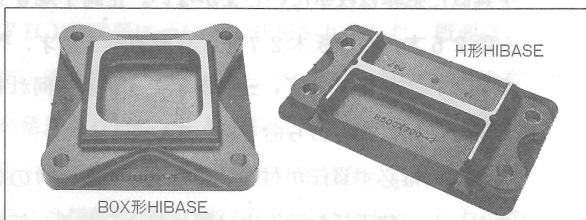
アーバニア千代田見学会風景

支部の動き

- ・61年度構造家懇談会中部総会 5月17日
- ・名古屋市総合体育館建設現場見学会 7月5日
- ・行政の担当者との懇親会 9月5日
- ・渡辺支部長・辻井副支部長静岡地区会員訪問 9月19日
- ・アーバニア千代田(RC造住宅)現場見学 10月4日
- ・渡辺支部長・本郷理事北陸地区会員訪問 10月18日
- ・理事会
 - 5/26 構造懇総会(東京)報告, 愛知県構造審査要領の取扱い(技術委員会担当), 事業委員会予定報告, 山田峰夫会員(岐阜)香典承認
 - 8/1 行政との懇親会9月5日に決定, 建築学会主催講習会後援依頼承認, 北陸地方会員訪問に渡辺支部長・本郷理事、各委員会活動報告
 - 9/5 行政との懇親会内容確認, 事業委員会の見学会講演会予定報告, 設監協主催後援依頼承認, 静岡会員訪問日時決定
 - 10/6 構造建築士制定に対する意見, 建築行政30年に出席の件, 静岡訪問記録, 行政との懇談記録, 各委員会報告
- ・事業委員会
 - 10/4 アーバニア千代田市街地住宅(公団)見学会
 - 11/29 CAD講演会 1/17 新年互礼会
 - 2/末 地下鉄6号線現場見学会
 - 委員会開催 4/11, 5/8, 6/17, 7/30, 10/28
- ・技術委員会
 - 愛知県構造審査要領(仮称)の作成 ①共通事項 ②RC造 ③S造 ④SRC造 ⑤基礎5分科会
 - 委員会開催 6/9, 7/7, 8/11, 9/8, 9/29, 11/5
- ・広報委員会 6/20, 7/10, 7/29, 9/4, 11/18

(財)日本建築センター評定取得。

スピード時代に応える日立ハイベース工法。



露出形固定用柱脚

日立HIBASE工法

新耐震設計法準拠

- ★建築基準法第38条に基づく認定 建設省東住指発第1334号
- ★ハイベース工法 評定 BCJ-S723

日立金属株式会社

本社 〒100 東京都千代田区丸の内2-1-2(千代田ビル)
☎(03)284-4794

中部支店 〒450 名古屋市中村区名駅4-6-18(名古屋ビル) ☎(052)582-3377

日立ハイベース工法の特長

- 露出形で柱脚の固定度が増大
- 施工が容易
- 信頼性が向上
- 自由な平面設計が可能
- コスト低減が可能
- 工期の短縮が可能